

8 年目を迎えたマッキンリー観測登山 3 年連続センサーが無事

プロジェクトリーダー・登山隊長 大蔵喜福



第 8 次マッキンリー気象観測登山隊・全員登頂



1997 年(平成 9 年)
12 月号 (No.631)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

8 年目を迎えたマッキンリー観測登山	1
平成 9 年度自然保護全国集会	4
DHAULAGIRI 通信・4.5	5
報告	
図書委・「山を語る」第 5 回	6
総務委・'97 年度新入会員オリエンテーション開催	6
資料委・山岳博物館等連絡会議	7
集会委・きのこ山行	7
95 同期会・紅葉の山と歴史探訪	8
データバンク研・インターネット・ホームページを開設	9
海外の山	8
支部だより	
熊本支部・創立 40 周年記念行事	10
石川支部・創立 50 周年を祝う	10
山形支部・真昼岳・和賀岳	11
岐阜支部・済州島ハンラン山	12
東西南北	
地球環境に果たす役割	13
赤シャツについて	14
還暦のマッターホルン	14
新疆・巴音布魯克草原の旅	15
映画「セブン・イヤーズ・イン・チベット」が公開	16
赤嶺山から女峰山の縦走	17
図書紹介	18
JAC グッズを頒布	19
会務報告・会員異動	20
INFORMATION・ルーム日誌	21
新入会員	22
書籍受入報告	23

▶ 日本山岳会事務取扱時間
月・火・木・土曜日 10~20 時
水・金曜日 13~20 時
▶ 図書室開室時間
日曜・祭日・月曜日を除く毎日 13~20 時
▶ ルーム年末年始休み・12 月 28 日
~1 月 5 日

■気象遭難原因追及へ

九〇年二月、JAC 科学委員会の中に、気象遭難原因究明の気運が高

一九八〇から九〇年代にかけて、登山の潮流は、その突先にヒマラヤ巨峰の厳冬期登攀をかけた、単独、無酸素など、より激しく純粋な冒険が多く、多くの話題を呼んだ。その陰で、名だたる世界の高山に幾多のクライマーの命が消えた。

そのアクシデントの原因は、主に悪天候による気象遭難として伝えられたが、真相が解明された事故は数少ない。(例)日本山岳会(以下 JAC と記す)に関わる近年の遭難としては、八二年冬期エベレストでの加藤保男氏ら二名、八四年冬、烈風のデナリ(マッキンリー)に消えた植村直己氏、同じく八九年の山田昇氏ら三名が記憶に新しいところだ。

観測対象の山は、機器設置に現実的で条件がよい、アラスカ・マッキンリー山を選んだ。この山は植村、山田氏等の遭難とも関連し、JAC と関わりも深い。ハロルド・ソロモン会員と共に、その年の春から実現に向かって行動を起した。

アラスカの国立公園局との交渉や資金繰り、隊員の確保など九〇、九

まり、冬期高所山岳における気象遭難の問題について、研究会やシンポジウムなどが開催され評価を受けた。私は以前より気象遭難防止のためと高所登山戦略に役立つ、なまの気象データ(とくに風)の収集に興味を覚えていたので、科学委員になると同時に、その研究活動の一環として気象観測登山を行うプロジェクトチームのプランを練り、JAC 科学委員会傘下の研究活動として位置付けてもらった。

一、九二年と苦勞したが、九三年より九五年の三年間は、JAC海外登山基金の援助金をいただくことができ、たいへん助かり感謝している。基金の補助で弾みがついて、今年で第八次を数えることができた。

■経過概略

第一次JACマッキンリー気象観測登山隊は、九〇年六月マッキンリー西稜の五七一五メートル地点に定点観測機器を設置。以来毎年同時に登山隊を派遣し、機器点検保守、センサーと記録装置の回収・据え替えを実践してきている。初年度は話題性が高く、マスコミなどにスポンサーになっていただいたが、第二次隊は資金難に陥り、回収するだけの目的の個人登山になってしまった。しかも、現場に着いてみると、センサー支柱が倒壊していて、すべての努力が水の泡となった。奈落の底に引き込まれる思いだったが、成し遂げようという意欲が逆に湧いてきた。挫折する醜態はさらしたくないと一念発起し、資金を集め第三次隊を組織、観測機器再建に意欲的に挑んだ。この年から隊は、本格的にJAC学生部・青年部のバックアップで研究意義と高所登山を学ぶ機会として、学生の参加を促してもらうことになり非常に有り難かった。また多

くの委員会、並びに会員から支援をいただき感激した。

よって隊の目的も観測だけにとどまらず、マッキンリー全員登頂も並列に目標に掲げ、総合的な登山の訓練を行う登山隊にした。その上、環境先進国アメリカ合衆国の国立公園環境行政の在り方と実際も経験できるという、多くの意義を持ったプロジェクトになった。蛇足ながら、この八年間、隊長の私を含め、登山隊員延べ五十名全員が登頂を果たし、観測機器の回収他を成し遂げ、誇り高き登山として自負している。現役学生の参加は二十九名にのぼる。

■データ収集の苦勞

データの収集に関して第四次までは、物理的な動きに頼らざるを得ないセンサーが、激烈な自然条件に耐えることができず（とくに風力・風向センサー）、毎年破損の憂き目にあってきた。悔しさの中で壊れたセンサーを回収し、帰国後は原因を追究、改良を重ねる連続だった。高所極寒の劣悪な気象条件下では、気温センサー等を除き、年間無人観測を保証する機器はない。常に開発しながらというハンディがついて回ることになった。年間通して風のデータが取れるようになったのは、やっとのこと第五次回収のデータからで、

今年で三度目になる。いま安堵の気持ちでいっぱいだ。

■本年度の報告

第八次登山隊は、私の個人的登山（チョモランマ遠征）が、諸事情で遅延したため、隊長として会の皆さんに多大な迷惑をかけた。五月二十五日私がアタックのためノース・コル（七〇二八メートル・C1）に待機していたところ、村井龍一元常務理事より衛星電話を通じて連絡が入った。その内容はアラスカからのもので、「レンジャーは大蔵が一緒でなければ、登山はまかりならぬといっている。あなたが、確実に行けるかどうかはすべてにかかっている」中止になれば学生を悲しませるし、延ばせば試験期間にかかる。「何としても行きます。送り出してください」と返事をした。宮下秀樹前副会長にも駄目を押され「遅れて参加する隊長を三三三〇メートルデポキャンプで、本隊が待つ」という内容で打ち合わせは終わった。

以後、絹川祥夫理事ほかの奔走のお陰で、本年六月八日、隊は無事アラスカに渡り、十二日より登山活動に入った。カトマンズを六月十一日に発った私は、バンコックを経由し十二日成田着、東京に一日とどまって十四日にアンカレッジ着。十五日

には氷河の上という強行軍だったが、予定通り十七日日本隊と合流できた。

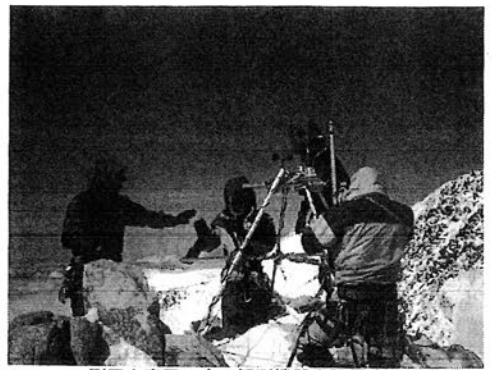
以後順調に登山活動ははかどる。

二十四日に烈風と寒気の中、無事機器交換作業を終え、翌二十五日全員登頂と一気呵成に事を済ませた。

今回は天候に恵まれたこともあるが、最短の十五日で登山活動すべてが終了した。参加した学生隊員の体力、技術、行動思考が高いレベルにあったことがその理由である。とくに隊員の高度順応が、問題なくできたことが大きい。前段階での荷揚げ回数を増すことで、無理なく成果を上げることができた。さらにザイルパーティー、テント生活、すべてにおいて隊員の意志統一ができ、学生としては素晴らしい優秀なメンバーだったといえる。

例年になく温暖で安定した天候であつたことも短期に終了した理由に数えられるが、その分下部氷河のクレーバス（の発達）には、相当難儀したことを付け加える。スキーを使用していてヒドンクレーバスに落ちるという状況もしばしば起こり、氷河歩行の怖さを改めて感じた。

隊員は法政四年・板谷耕介、同三年・木島由晶、慶応三年・榎並祐史、上智三年・太田幸介、早稲田三年・蛭田弥希君の五名に大野毅会員と私を加え総勢七名。



烈風と寒風の中で観測機器を設置する

■データ分析について

九〇年より九七年までのデータは現在、このプロジェクト参加者と多方面の専門家を頼りに順次、多角的に分析され、徐々に役立つデータに変えられつつある。それぞれにはボランティアでお願いしているもので、本当に感謝している。なお、マッキンリーの国立公園局へ送る毎年のレポートは、非常に喜ばれている。

第五次までの報告は「山岳八七年」と「山岳八九年」に、第六次も含めた中間報告書は昨年（九六年）春に科学委員会より小冊子として発行したゆえに詳細は省くが、実測データ中の最低外気温度は、九五年十二月のマイナス五九・四度C。データ補正および高度補正をすると頂上の最低

気温はマイナス七〇度Cを超える。最大風速は三杯型センサーでは九〇年八月の六三メートル/秒、九五年二月の六三・八九メートル/秒、プロペラ型センサーでは九四年七月の八二・五メートル/秒、などがある。どれも前後は丸一日から数日といったスパンで強風が吹き荒れている状況だ。八二・五メートル/秒は時速三〇〇キロという途方もない烈風である。風向は北あるいは西からが多い。

最低気圧は九五年の二月に約四三〇ヘクトパスカルを記録した。夏の気圧差を単純にメートルで現すと、冬の頂上は約九〇〇メートルも高く、なんと七〇〇メートルをゆうに越える勘定だ。

夏の湿度は六〇パーセント以上、冬の最低が四五パーセントとなっているが、冬平均で五五パーセントというのは、想像を絶している。

観測地点平均外気温度のデータからは、いま問題になっている地球温暖化、とくに森林に悪影響を及ぼす凍土の溶解というアラスカの温暖化を裏付ける推移がみられる。年ごとに少しずつ上昇しているのだ。

本年度回収した九六年度のデータは、昨年十二月の末に何らかの理由（静電気など外部よりの信号）で、データロガ（記録コンピュータ）が

自動的に停止していて、半年分しかとれなかったのがつくづく残念だ。

■登山と自然保護

さて、アラスカの国立公園局レンジャーの登山指導（環境行政）の在り方を少し記す。

レンジャー・ステーションでは、登山隊が到着するとまず、入山登録料ひとり一五〇ドルの徴収があり、届け出チェックを済ますと、ビデオ講習を含んだブリーフィングを行う。事前の注意として氷河歩行などの技術的なこととともに、自然保護・保全に関して、念を押される。ゴミ、し尿はテイクアウトを義務付けられる。実際の、マッキンリー登山者は受益者負担を踏まえた処理を実践し、概ね残すのは足跡だけという見事さだ。わが国とは状況が違うとはいえ見習うべき内容といえる。

■プロジェクトの今後と展望

ちなみにマッキンリーのプロジェクトは、科学委員会の予算には全く関わらない傘下のプロジェクトというスタンスを取っている。相応な資金が要り、委員会予算内では到底不可能であるからだ。基本的に個人負担、資金調達も個人の責任という、クラブ活動としての真の姿（ボランティア精神）が、この活動をここま

で継続できた力であったと確信している。

ただ、これが会としてのプロジェクトに昇格していたら、もっと違う展開になっただろうと思うとやや残念だ。声を大にして理事会に訴えなかったことが悔やまれる。

このプロジェクトはあと二年、第十回で一区切りのつもりである。その後は、地元のしかるべき機関（大学の研究機関か気象観測所など）に継いでもらいたいと考えている。内容をさらに進め、地球規模で活用できる大気サンプリング等までひろげ、汚染や温暖化などの実態を観測できればと夢を抱いている。

来年以降、残り二回の登山隊に関しては、いままで男性ばかりだったから、一度は男女混成か女性隊を組みたいものだと思っている。

なお、気象観測が一応終了しても、多くを研鑽できるマッキンリー登山は、今後学生部海外登山として指導部等に引き継いでもらい、学生の合宿として残したいものだ。横のつながりを大切にしたい合宿形態は、若々しいJACの基盤をつくる何らかのヒントにもなるのではないかと考える。

■JAC登山活動の在り方

会本来の目的は登山であると明言

しても、その指向はどんな形態のどんな考えを持った登山なのか、いまひとつ確たるものがない。

JACの登山は、会員のみなならず広く登山界に目を向けた、志の高い(理由)ものでなくてはならない。だから、ただ攀るだけの登山はJACの登山ではないと考える。

個人的にはより困難を求める強烈な冒険登山が最高と疑われないが、ハイレベルの登攀、冒険的登山は組織だってやるものとは次元が別だ。

学術あるいは研鑽ある活動と認められる登山、それに関連した活動を組織がバックアップするという『山を科学する姿勢』が最も重要であると思っている。「冒険とは知的興味を身体で具現するもの」という言葉があるが、我が会のとるべき道は、これを実践することにある。

JACには登山界全体の、健全な発達に寄与する頭脳と経験、そして力がある。そのほかの活動も、もつと外へ、広く未来に向け、志の高い価値ある、そんな行動こそが使命ではないか。期待されるJACとして、その未来に問われているのは、組織と組織論で疲弊したロビーストの山岳会ではないはずだ。『登山界の良質の核』である。

気負わず怯まず、この姿勢を崩さず山登りを続けていきたいものだ。

平成九年度自然保護全国集会 各支部とも独自のプロジェクトを展開

自然保護委員会

平成九年度の自然保護全国集会は十月十八日(土)十九日(日)に、東海支部の協力を得て、三重県鈴鹿市・椿会館で開催された。ここは鈴鹿市中心部の西北方、鈴鹿山脈の山裾にあり、伊勢一宮・椿大神社が鎮座する。参加者はJAC本部、関東地区、越後、信濃、山梨、東海、岐阜、京都、関西、福岡の各支部、計五十一名。熱気あふれる集会となった。



各支部の活動状況が次々に報告された。於鈴鹿市

十八日午後三時、篠崎自然保護委員の司会で開会。田辺壽常務理事の挨拶に引き続いて、澤井実行委員長が挨拶をかねて概況報告(鳥海山南麓イヌワシ調査報告書)作成、環太平洋一周環境調査の成果など)を行った。なお、尾上東海支部長の挨拶は後ほど行われた。

一、各支部などの活動状況報告

①イヌワシ調査・佐藤淳志(自然保護委員・山形支部)

イヌワシの生息が確認され、鳥海山南麓スキー場計画は中止。このたびの成果は組織の力。

②山梨の山岳環境と登山の将来像・山村正光(山梨支部)

三年にわたってフォーラムを開き、南アルプスの将来像を探ってきた。その成果を県知事に提言。

③安曇野からの報告・植松晃岳(信濃支部)

リゾート開発、オリンピック・スキーコースなどによる自然破壊の問題が山積み。

④ブナを植える会について・阪下幸一(関西支部)

各地におけるブナ植樹の状況。片

山会長が九月五日に亡くなられた。⑤芦生の森を世界遺産に・高松武夫(京都支部)

原発関連施設などの開発から守るために、芦生の森を世界遺産にする運動を行っている。JACも力を貸してほしい。

⑥マッキンリー気象観測と自然保護・大蔵喜福(自然保護担当理事)

気象遭難防止を目的としたマッキンリー気象観測も開始してから八年たった。この間、アメリカの登山者のし尿処理、ゴミ問題などについて見聞したが、学ばべきものがある。

⑦苗場山のトイレについて・石田国夫(越後支部)

汚染が甚だしく問題になっているが、近く新設の運びになっている。⑧山の自然学講座とネパール・シバプリの丘植林・大森弘一郎(自然保護委員)

自然保護活動の一つのパターンとして実施している。その状況を説明。⑨自然学研究会の一年・大船武彦(自然保護委員)

平成九年度の活動として、上高地でのインタープリテーション、ライチョウ保護、木曾駒で気象観測と登山道保全に関する調査を実施した。

⑩K2登山隊緑化事業報告・遠藤京子(京都支部)

東海支部のK2登山隊緑化事業と

DHAULAGIRI 通信・4,5

日本山岳会青年部
ダウラギリI峰登山隊1997

隊長・松原尚之

10月10日(BC・4700m)

登山開始から1か月、隊員一同元気でがんばっています。

現在ルートはペアの上部、標高約7100mまで伸びています。あとキャンプ4(7200m)、アタックキャンプ(7500m)を作り、7750mまでルート工作を行った後、アタックをかけたいと思っています。しかし、9月下旬より悪天、豪雪が続き、登山は苦戦を強いられました。本来は10月15～20日くらいの間にアタックを考えていたのですが、

だいが遅れそうです。まるで冬の劔岳のような胸まで没するラッセルをヒマラヤで経験させられました。

私たちは明日BCを再出発し、上部に向かいます。より慎重に、最後までがんばります。

11月6日(カトマンズ)

長い間ご心配をおかけしましたが、11月4日、全員無事にカトマンズに帰ってきました。登山のほうはまれに見る悪天・豪雪に阻まれ、ギリギリまで粘ったのですが、残念ながら7500mを最高到達点として敗退となりました。

ダウラギリ北壁^{ベア}「梨」ルートは、ナイフエッジにはじまり、上部雪壁では急傾斜のためC3(6700m)、C4(7100m)でまともなテントサイトが得られず、そして最大の障害として降雪の多さに起因する雪崩の頻発など、ヒマラヤの雪のルートの困難さを凝縮したような登山を

私たちに強いました。しかし隊員たちは日数、食料ともに乏しくなる中で、困苦きまる登山に一人として脱落者の出ることもなく、最後まで力の限りをふりしぼりました。

登山を終わってみて、むろん登頂できなかったことは残念ですが、何よりも全員が無事に帰れたことに、心からホッとしています。そしてまた、可能性の少なくなる中を、最後まであきらめずに全力を尽くしたことに、ある種の満足感を覚えます。これは全隊員が、多分同じように感じていると思います。

長く、きわめて密度の濃い2か月間でした。参加した隊員のすべてが今回の登山を糧として、これからもより充実した登山を続けていくことでしょう。さらには困苦をともしした山仲間として、生涯パートナーシップが継続されて行くことと思います。

皆様には長い間のご支援、本当にありがとうございました。

して、ヒマラヤン・グリーン・クラブと協同でポプラの植林を行った。登山時期と植栽適期とが合わないという問題があったが、技術的に克服。概要をスライドを交えて報告。

①環太平洋一周環境調査登山隊報告
・小川務、篠崎純一(東海支部)
環太平洋諸国の山々を登り、空気、雪、雨水、さらに現地住民の爪を採取して、地球規模での大気汚染状況を調べた。その状況をスライド、詳細なデータにより報告した。

二、登山者として取り組むべき自然保護(討議)

話題提供・小川務(東海支部副支部長)：登山者として、次の二つを目標に自然保護に努めている。

①登山者として当然せねばならない自然保護。つまり山を汚さないこと、ゴミとし尿問題(ペーパーの処理、持ち帰りなど)はなかなか難しい。

②登山技術をもって自然保護に貢献すること。登山技術を持つ我々でなければできない自然保護の仕事があることを知るべきだ。東海支部では環太平洋一周環境調査登山計画、K2登山隊のバルトロ街道の緑化事業などを実施した。

科学的なデータに基づいた自然保護が大切。JACのフィールドマナ1・ノートの改訂を自然保護委員会に提案したい。

以上の小川会員の話題提供に対し、主にペーパー処理の問題について、外国の例を含めて情報交換がなされた。フィールドマナ1・ノートの改訂については、澤井委員から取り上げたい旨発言、全員の賛同を得た。

最後に、大蔵理事から閉会の言葉が述べられ、四時間に及ぶ大会の幕を閉じた。

翌十九日は、好天に恵まれ、椿大神社の後ろにそびえる入道ヶ岳(九〇六メートル)の登山を楽しんで、解散した。なお、来年度は京都府美山町(芦生の森)での開催が予定された。(伊藤 敏)

カナダ冬絶景オーロラ^{スペシャル}

●山好きな方におすすめの冬のロッキー展望コース

出発日(水・土曜日を除く)	旅行代金
●1/4～1/16 ●3/8～3/13	¥195,000
●1/18～3/6	¥198,000
●3/15～3/31	¥209,000
●1/1～1/2	¥225,000

運輸大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員

アルパインサービス株式会社

〒105 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911

大阪 ☎06(444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

報告

REPORT
12月

図書委員会・「山を語る」

第五回は「ヒマラヤの東」

十月二十四日、集會室において当山岳会会員である「ヒマラヤの東」の著者・中村保氏を講師にお招きし、八十枚のスライドを交えて貴重なお話をうかがった。

この本は九〇年から九五年秋にかけて十一回もヒマラヤの東の地域を旅したものをまとめたものである。その後も同地を訪ね続けて、この夏には十四回を数えていられる。

講演では、この地を三つのテーマに分けて話していただいた。続けて足を運ぶことになった動機に次いで、参加者に配布した地図にしたがってこの地方の地形について説明、スライドに入った。スライドでは今日世界で最も知られざる地域でもある山々を主体にしなが、自然と人間、

生活、文化、宗教などについて詳しく解説された。

「梅里雪山一周巡礼」では、フランスの女性探検家アレキサンドラ・デビッド・ニールの入域以来、七十余年外部の人が入っていない地域や、今まで紹介されたことのない雪山や峡谷が好天に恵まれた画像で写し出された。続いて回を重ねた長駆の「横断山脈の旅」、そしてこの夏の「能海寛の足跡を訪ねた道中」の素晴らしい光景が写し出され、我々を魅了した。また画面に写し出されるいくつもの秀峰が未踏峰であるところとまなげに語られ、視聴者の登頂意欲を駆り立てた。

講演後の懇談会では、いかにして入山、入域の許可を取るのかとの学生部会員の質問に対して、地域と登山が探検旅行か、といった目的によって違いがあることなど、具体的に蓄積したノウハウも披露してください。

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

総務委員会

九七年度新入会員オリエンテーションを開催

十月二十五日(午後二時より、今年度上期入会者(対象は会員番号一二四三九より一二六〇八までの百七十名)のオリエンテーションが当会ルームで開催された。北海道、福井県、鳥取県など遠方からの参加を含め三十九名が出席した。

絹川担当理事による開会の言葉ではじまり、斎藤会長が歓迎のスピーチで「山を楽しむクラブライフという当山岳会の伝統を引き継いでもらいたい。また、大切なのは個々で考える自分流の山登りではないか」と語った。ついで南川総務委員がビデオを交えながら、どのように会になじんできかなど、組織と活動について、また田村事務局員から当会自慢の図書室利用について説明がなされた。

また、未開放地域へのアプローチについて、講師と参加者がそれぞれの経験や意見を交わすなど、大いに盛り上がり、未開放の各地に関心を持つ会員にとってよきアドバイスが得られた。

午後九時過ぎ、盛会裡に閉会した。参加者三十四名。(南井英弘)



97年度の新入会員のオリエンテーションは39名が参加して開催

れた。

記念撮影のあと、大蔵理事より「マッキンリー気象観測と自然保護」と題した講演が行われた。日本山岳会との関わりを交えながらの興味深い話に、新会員は熱心に聞き入っていた。

その後は二つのグループに分かれて、参加者の自己紹介などがユーモアたっぷりに行われた。「自然エネルギーの研究や気象観測など、山に関する科学的な活動を積極的にやっていることを知り、参加してみたいと思った」「風景写真を撮る目的で登山を楽しんでいる。息子との海外登山が夢」など多彩であった。

質疑に対しては出席の理事、総務委員が回答した。

懇親会は勝山理事の司会ではじまり、会長、小倉、大森両副会長をはじめ理事役員も多数参加し、肩をすり寄せながらの山岳会らしい雰囲気、交流が深まった。そして同期会発起人立候補者も四、五名が出て、和やかな集いであった。(高原三平)

資料委員会

第一回全国山岳博物館等連絡会議・開催される

十月二十四、二十五日、全国の山

岳に関係する博物館や美術館との交流を目的とした会議を、上高地山岳研究所で開催した。八館の関係者と資料委員会の委員が二日間、熱心に討議を進めた。開催に当たり、鯉坂理事の挨拶、山口委員の主旨説明があり、引き続き自館紹介が行われた。また、田畑委員による地下室の展示資料の説明、三上委員によるインターネットホームページ試行版のデモンストレーションも試みられた。

討議の主な内容は、資料の収集、保管管理、寄託、展示の方法、情報交換の場、及びネットワーク造り等話し合われた。各館の専門家より、貴重な助言や方法論や要望をうかがい、将来の活動の示唆が得られたので、今後とも、資料委員会が事務局を務め、継続発展をしていきたいと考えている。

参加博物館・美術館(敬称略)

・アルプス山岳館(長野県松本市)

滝沢重明

・大町山岳博物館(長野県大町市)

峯村 隆

・田淵行男記念館(長野県南安曇郡豊科町) 財津達弥

・河口湖美術館(山梨県南都留郡河口湖町) 足立 朗

・東京都写真美術館(東京都目黒区三田) 関次和子

・植村直己冒険館(兵庫県城崎郡日

高町) 正木 徹

・伯耆国山岳博物館(鳥取県日野郡溝口町) 吉川明秀

・立山博物館(富山県中新川郡立山町) 吉井亮一

参加資料委員(鯉坂理事、山口(俊)、田畑、原、三上、溝口、鈴木、菅田、山口(久)、町田) (山口俊輔)

集委員会

七ツ岳、三岩岳・きのこ山行

十月十八、十九日、福島県南会津の七ツ岳、三岩岳のきのこ山行に参加した。夜行バスで七ツ岳羽塩登山口に着き、現地直行組と合流して総勢四十八名の大集団となる。



好天と、素晴らしい紅葉の中を歩く

快晴、素晴らしい紅葉の山道に入る。明るい白樺林を通り抜けると程窪沢に出る。沢沿いを登り、水量の少ないナメ状の沢を落葉を踏みしめながら快適につめる。沢から離れて尾根に取りつく頃から展望が開け、楽しみながら登る。稜線に出ると賽の河原で、少し登ったところが一六三メートルの七ツ岳山頂だった。

頂上から燧ヶ岳、会津駒ヶ岳、那須連峰、帝釈山などの展望をしばらく楽しんだ後、針生方面に別れて高杖スキー場へ向かう。草紅葉の中を本日の集合場所アストリアホテルに下り、バスで小豆温泉「花木の宿」へ。

十九日、宿の前で記念写真を撮り三岩岳に向かう。黒檜沢の右岸、見事に紅葉したブナの原生林の中を登る。黒檜沢に架かる橋を渡り、ジグザグの登りを繰り返すと旧道分岐の尾根筋に出る。ここからは急登だが、ブナ林の紅葉の美しさが登りの苦しさを忘れさせてくれる。勾配もやや緩やかになり、オオシラビソの樹林帯になると三ツ岩小屋だ。ここからは尾根上を四十分で二〇六三メートルの三岩岳に着く。頂上からは南に美しい稜線が中門岳、駒ヶ岳へと続く。遠くには越後駒ヶ岳が見える。昼食後、二日間の好天と、素晴らしい紅葉に恵まれた山歩きに満足しながら往路を下山した。(中西豊和)

95同期会

紅葉の山と里の歴史探訪

雨の予報の十月四、五日、二十七日の参加者で、新宿よりバスに乗り清水の集落へ向かう。

今夜の宿「雲天」では、当主の小野塚氏が庭先で出迎えてくださる。夕方まで集落の散策を楽しみ、のんびりと過ごす。秋の草花を見つけたら、木の実を探したり、童心に戻って一同楽しそうであった。

さて、お待ち兼ねの夕食が始まる。山菜ときこの料理が大皿で次から次へと運ばれてくる。そのたびに「ワァー」と歓声が沸き上がる。食材の豊富さや味もさることながら、心のこもったもてなしが一品一品から伝わってくる。「八海山」の美酒つきでますます幸福度は増してしまふ。

ふくれたお腹が心地よく、囲炉裏の周りは仄かに暖かく……。そんな中で小野塚氏のお話が始まった。巻機山のリゾート地化に反対してきたこと、これから村をどのように築いていくのかという話、「雲天」のテーブルに並ぶあの豊富な食材を集める苦勞話、マタギとしての夢、熊の話など、皆すっかり聞き入ってしまう。五日は雨の予報が外れ、朝方は曇り空であった。時々雲の合間からビ

海外の山

「人間形成」について

江本嘉伸

スピードスケートの話である。

大学に十八名の部員がいた。勝たせたい、とする立場から見ると、気合いが入っていない。「むっと真面目にやれ」と言ったら、反発された。

十八人の希望を聞くと、十三人が「スピードスケートを通じて人間形成をしたい。勝ち負けは問題ではない」と答え、五人が「世界のひとと戦って勝ちたい」と言った。

以後十三人はこれまで通りとし、五人は超ハードなメニューに挑んだ。猛練習の過程でさまざまなドラマがあった。結果は、この五人の頑張りで第二部だったチームは一部に昇格、ついにはインカレで優勝するまでになつてしまった。

「人間形成とは何なのか。世界を目指して死に物狂いでやった学生のほうが人間形成もできたのでは……」

十一月三十日、富山市で開かれた文部省登山研修所創立三十周年を記

念としての研究会「山岳事故対策を考える」の席で、専修大学の前嶋孝教授が披露した話だ。

前嶋は、低酸素状態にした「アルプスルーム」をスピードスケート選手の手トレーニングに活かしており、その経験を登山家たちに話してもらいたい、と講師を頼まれた。

ジャンルは違うが、山登りの現状に通じる話だった。

午後のシンポジウムでは、雪崩に襲われ、間一髪助かった最新の事例報告が印象に残った。

チョモランマをソロで目指した戸高雅史は、九月十三日、北稜七五〇メートル地点で雪崩に遭った。

「真上のスノードームの真下の雪面に大きく線が入り、厚い大量の雪が大波のように落ちてくるのが見えた。その瞬間、私は覚悟し、すべてのものに別れを告げた。もう左右に動いてしのぐレベルではなかったのだ」

日本の仲間たちへの通信に、そう戸高は書いていた。K2を無酸素ソロ登頂した強者が、ベースに妻を残して呑み込まれようとした一瞬だった。しかし、奇跡的に雪は目の前で

二手に分かれ、戸高は生き残って富山の研究会で報告できたのである。

この会報に何度か通信が掲載されている日本山岳会青年部ダウラギリ

I峰隊も、雪崩の恐ろしさを体験したことが報告された。

十月七日、六〇〇メートルの第二キャンプで朝七時半に最初の雪崩が起きた。一つのテントがつぶされ、それを建て直そうとしていた時、八時頃二発目が襲った。

松原尚之隊長ら二人が埋まり、三人が一〇メートルほど流された。

「二本しかなかったスコップがもっていかれ、一本しなくなっただけです。その一本で必死に二人を掘り出した」と副隊長の棚橋靖は語る。

雪崩に人が埋まった時、スコップは貴重な発掘道具となる。それを身をもって体験したのだった。

戸高と松原たちの話を聞いて、本人たちには申し訳ないが、登れなくてよかった、との思いを持った。もし登頂したら、とかくその成果の面ばかりが強調され、スコップの確保の重要性など雪崩遭難から得た教訓は重要視されないだろう。

スケートは「死に物狂いで」やっても実際に死ぬことは稀だが、登山では雪崩ひとつであっさり逝ってしまう現実がある。

「人間形成のために」山に登る人は多いと思うが、日本の冬山やヒマラヤの高峰登山は、勝つ気で向かって、それでどうか、という世界だ。



紅葉が秋雨にぬれた巻機山頂上で

ロードのようにしっとりとした紅葉が姿を見せてくれる。全員が頂上に着いた頃雨も降り出す。下山後、温泉で汗を流し、バスで帰路につく。「雲天」の料理とお酒とお話に酔いしれながら、楽しく有意義な時を過ごすことができた。小野塚氏が「山には山の生き方がある」と、言葉をかみ締めるように話されたあの姿が印象的であった。(奈良千佐子)

データバンク研究会

インターネット・

ホームページを開設

当研究会は創立九十周年記念事業の一環として、二年前に設立されました。これまで各種データバンクの

構築について十二名のメンバーで検討を進めてきましたが、このたび標記のホームページを正式に開設することとなりました。すでに、会報で試行版についての紹介がされておりますが、先の年次晩餐会にて正式版の第一号をオープンしました。皆様、ご覧ください。

なお、第二号以降につきましても鋭意内容を更新しながら展開させる予定です。

【ホームページの概要】

国内版と英語版の二本立です。内容は異なっており、国内版は会の紹介から支部情報、友好団体からの記事に至るまで幅広い内容と、当会の海外遠征の成果(データ)を中心にこれまでの分と合わせて逐一取り込みます。

英語版は世界に向けて当会の存在を発信するとともに、国内版同様、海外遠征の成果(データ)を取り込んで行く予定です。

【アドレス(URL)】

<http://www.jac.or.jp>

【ホームページ・今後の進め方】

①一九九七年十二月〜九八年三月立ち上げ期間、データ蓄積開始。

(マナスル遠征記録からスタート)

②九八年四月〜二〇〇二年 展開期間。(データの充実を図りながら、

外部ネットワークとの接続、会員と

の情報共有・活用を進める)

③二〇〇三年以降 本格運用。

【ホームページの運営】

運営についての基本的な原稿などの提供、編集は各理事、委員会の協力で行われています。これをホームページに作成する作業は『データバンク研究会』が行っています。両者は定期的に打ち合わせしながら運営を開始しています。しかし、すべてボランティアで行っているため、営利を目的とした情報サービスのようには速やかな対応が取れないこともあるかと思えます。ご理解の上ご了承下さい。

【ホームページに関する問い合わせ】

ホームページ記載の問い合わせ先、ならびに電子メールの連絡先へお願いします。

日本山岳会の事務局では内容についてお答えできませんので、後記のメンバーに連絡してください。

● データバンク研究会(資料委員会に帰属) 担当理事・鯉坂青青

・事務局(まとめ)

山口俊輔

TEL・〇四五七八二四九八九(夜)

FAX・〇四五七八〇一七三三九

ID: fwh4724@mb.infoweb.ne.jp

(不在時は留守番電話にお願いします。あとで連絡します。)

・技術的なこと(連絡は夜間に)

三上博民

TEL・〇三三五六九三三七五二八

FAX・〇三三五六九三三七五三九

多田真弘

TEL・〇三三三四六七八〇〇六

森山善弘

TEL&FAX・〇三三三三九四一三五八〇

・一般的なこと(連絡先は会員名簿)

石田要久 鈴木敬吾 菅田紘八朗

松尾良久 溝口洋三 清水 享

遠山元信

【ご協力お願い】

データバンク研究会ではホームページ運用、各種データバンクの運営を円滑に進めるため、左記について協力して下さる方を募集しています。在宅可で日本全国居住地は問いません。

なお、ボランティアでの協力ですので、あらかじめご承知ください。

①山岳写真 主として日本国内の山の写真(場所、時期、撮影者明記)を提供してください。

②翻訳 英語版も定期的に更新します。翻訳できる方がきわめて不足しています。ぜひご協力ください。

③ホームページ作成 データ入力やイラスト制作をお願いします。

連絡は「データバンク研究会・事務局 山口俊輔」までお願いします。

「お詫び」会報十月号で試行版のアドレスに一文字誤りがありました。お詫びいたします。(山口俊輔)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

熊本支部

創立四十周年記念行事開催

一、九州四支部合同会議

十月四日、熊本県阿蘇町のビラパークホテルで記念集會に先立ち、十六時三十分から三十三名が出席して九州四支部合同會議を開催した。地元熊本の本田支部長が座長となり、熊本支部（本田支部長）、福岡支部（松本支部長）、東九州支部（西事務局長）、宮崎支部（大谷支部長）からそれぞれ、現況と事業計画について報告があり、相互の交流を深めた。

二、記念講演会（斎藤惇生会長）

十七時から、四十三名が出席して「山を語る」と題する斎藤会長の記念講演會が開催された。熊本県出身の斎藤会長は「私の初登山は小学校四、五年生の頃、当時、父が嘉島町

（現在）の小学校の校長をしていたので、近所の飯田山（四三二メートル）に登った。五高時代阿蘇鷲ヶ峰でロッククライミングを初体験、こんな素晴らしい世界があったのかと、スポーツ登山に開眼した。その後の京都時代は、ひたすら北アルプスで登山活動を実践、必然的にヒマラヤへの傾倒を深めていった。今西錦司先生の初登頂を求めるパイオニアワーク論には大きな影響を受けた。それがサルトロロカンリやナムナニ峰の初登頂につながったと思う」、そしてヒマラヤ（チベット）での足跡を写したスライドを説明しながら、医師としての視点（体験）から、高所登山の厳しさを語られた。実践者の臨場感にあふれた迫力ある内容と、その淡々とした話ぶりに、来会者一同深い感銘を受けた。

三、記念祝賀会（懇親会）

十八時から、阿南誠志会員の軽妙な司会により懇親會を開催した。まず本田支部長から出席者への謝辞があり、ついで斎藤会長、松本（福岡）、大谷（宮崎）、西（東九州）各支部代表から祝辞が述べられた。小倉副会長の乾杯の音頭により開宴、それぞれのテーブルごとに懇談し、酒杯が重ねられた。また遠来の客（熊崎常務理事、中村太郎評議員、内田嘉弘京都支部会員ほか）から自己紹介

を兼ねたスピーチ、九州各支部の参会者紹介もあり、交流を深めた。

吉村前福岡支部長が、わざわざ新潟から持参した銘酒「越の寒梅」をはじめ、京都の酒や宮崎、熊本の焼酎など多くの差し入れがあり、酒席を盛り上げた。それにしても、中高年ばかりの参会者の飲みっぷりのよさには驚かされた。吉村前福岡支部長の万歳三唱でお開きになったが、その後は別室で夜半まで二次会、三次会が続けられた。

四、記念登山（阿蘇烏帽子岳）

翌十月五日八時、ホテル前で全員の写真撮影後、マイクロボバスで湯の谷温泉の登山口へ向かう。

登山リーダーの工藤副支部長から烏帽子岳登山コースの説明があり、草千里ヶ浜へ樹林帯の中の登山道を登る。ミズヒキ、ヤマハギ、アキチヨウジなど秋の花も多く、ちょっとした自然観察道である。文字通り道草を食ってゆっくり登る。約一時間半かかって直径が一キロもある広大な草千里火山の西側火口縁に到達した。とくにお願ひして、火山学者でもある松本福岡支部長に阿蘇火山の野外講義をしていただく。

ここから緩やかな草原の尾根をしばらく歩き、低灌木に覆われた急斜面をひと登りで、一等三角点がおかれた烏帽子岳（一三三七メートル）

の山頂に着いた。あいにくのガスで展望は定かではない。その上狭い山頂は腰を下ろす余地もない混雑。昭和五十三年四月、ここを訪れた今西錦司先生を偲んで斎藤会長の発声で万歳三唱、ついで紙コップの酒で乾杯。締めくくりは東九州支部の西孝子さんが、杖を振り上げてヤッホーと今西コール。その後草千里西端の草原で弁当を開いた。（本田誠也）

石川支部

創立五十周年を祝う

昭和二十二年一月、第二回国体を機に設立された石川支部の創立五十周年の記念行事が、十月十八、十九両日にわたり行われた。

■記念式典と講演

初日の十八日（土）午後、金沢シティモントホテルの大ホールに約百二十名の参加者が集った。本部からは斎藤惇生会長、小倉茂暉副会長、絹川祥夫総務担当理事が出席、越後、岐阜、京都、富山、福井の各支部長と支部員の方々、東京、関西、東九州からも参加をいただいた。会場前のロビーは十五時の受け付け開始前から、会員の旧交を懐かしむ顔や、グッズ販売の人混みでにぎわった。

十六時、記念式典がはじまり、津田支部長が「その時代、時代を支



本部・各支部・地元石川支部、全員の一体感に満足

えた会員、さらにその周囲で支えていた方々の力、五十年続いた事実の意味は重い。その歴史は稜線の縦走にも似て、ラッセルや重荷に喘いで過ぎ来しトレースを振り返り、前方のピークに夢を託して次々と尾根の起伏を乗り越えて稜線をたどり、いつの間にか五十年が経過していったような気がする。本当は全員に感謝状を贈りたい気持ちで一杯です」と挨拶。物故会員への黙禱後、斎藤会長の「五十周年おめでとう。本会もあと少しで百周年。JACの高齢化もいわれるが若手が頑張っている。会の発展のためにも若手が活躍できる環境が必要」との祝辞があった。藤平正夫日山協北信越代表（元本会

会長）の祝辞、各支部からの祝電披露のあと、元石川支部長の池田知幸、小林雄次郎会員に感謝状を贈呈して式典を終了した。

引き続き「還暦のシシャパンマ」と題し斎藤会長の記念講演に移った。

■祝賀会

講演終了後、会場を移して祝賀会が開かれた。小倉副会長の「日本山岳会を構成する半数が支部会員であり、本部と支部の交流を今後とも図りたい。十一月に広島支部も誕生する」との祝辞のあと、木戸富山支部長の乾杯、高木岐阜支部長の「加賀の白山は半分は美濃の白山でもある。岐阜をお忘れなく」とユーモラスなスピーチに盛り上がり、宮本福井事務局長の中締めでお開きとなった。

■記念山行

翌十九日(日)、二日続きの好天に恵まれ、ホテルを出発。記念山行は恒例の北陸三支部合同登山(第六回)も兼ねたため、本部の絹川理事や各支部の方々も含め、五十余名が「奥獅子吼山」に向かった。パラグライダーなどの全国大会も開かれる獅子吼高原ヘゴンドラで一気に上がる。

眼下に展開する箱庭のような手取川扇状地と日本海に見入る間に高原駅着。ここからなららかな稜線を頂上へ向かう。すでに紅く色づいた山道を、落ち葉を踏み締め、約一時間半

で頂上到着。カヤと草原の広く見晴らしのよい頂上は暖かく、遠く雪を頂いて山並みの上に浮き上がった白山の姿に感銘しながらビールで乾杯。各自思い思いに昼食をとり、後日の再会を期して山を下った。

山も終日機嫌がよく、当事者は大変だっただろうが、本部役員の方々、各地から駆けつけて盛り上げてくださった方々に、今までになかったような会員としての連帯感を覚えたことは、当石川支部として望外の幸せでした。心からお礼申し上げます。

(津田文夫)

山形支部

展望満喫・真昼岳・和賀岳

秋田・岩手の両県にまたがり奥羽脊梁山脈の真昼山地に属し、秋田仙北平野の東に連なる山々のなかで、ひととき高く丸みを帯び穏やかな感じの真昼岳と、和賀・朝日山塊の最高峰である和賀岳両山の山行は、山形支部の八月例会登山として八月三十、三十一日に、一泊二日、九名の参加で実施された。

早朝、朝もやをのけて車に分乗し北上する。奥羽本線湯沢駅を通過する頃には朝もやも晴れてきて、陽射しが眩しかった。真昼岳の登山口赤倉ノ鳥居から、初秋を感じさせる青



展望を満喫した真昼岳山頂で

空の下を、リーダーK氏を先頭に赤倉沢に沿って急坂を登る。偶然、下山してくる会友O氏との出会いなどもあって小休止。ほどなく頂上まで二キロの標柱を見て昼食をとり一息入れた。

尾根に取りついて杉林の中を登る。美しいブナ林を過ぎると、突然に視界が開けてヤセツルと呼ばれる尾根に出た。前方には真昼岳が見えてきた。峰越コースへの分岐を過ぎ、クマザサの中の緩やかな登りを続け、真昼岳の頂上に着いた。

素晴らしい展望で、眼下には仙北平野が広がり、稔りの色づきを始め、稲穂が輝いていた。南西には名山鳥海山の美しい姿もあった。ほぼ無風の山頂で心和む光景を堪能し、帰路は同じコースを今夜の宿、奥羽山

荘へ向かった。

翌朝は早めに出発。登山口から杉林を登ると、まもなくブナやトチ、ナラなどが鬱蒼と茂る原生林になった。和賀岳の美林とはこの辺りのことなのである。途中には「ブナ台」という休み場もあり、小尾根に出てすぐ冷水の流れる滝倉に着いた。

ここからブナの樹林帯。道はつづら折になり薬師岳山頂から伸びる稜線上の倉方に飛び出すように出た。ドーム状の薬師岳山頂を前方に眺めながら穏やかな稜線を行く。その先は急登が待ち構えていて、右手は切れ落ちたガレ場であった。息を弾ませて登りきると薬師堂分岐だった。右奥に和賀岳を眺めながらササ地帯を行く。

薬師岳山頂に到着。三百六十度のパノラマであった。目指す和賀岳はもちろん、小杉山、小鷲倉の稜線もよく見渡すことができた。

ここから先は展望のよい草原の道を北にとって進む。幅広い主稜線を少し下がったところが薬師平。高山植物の群生地帯で開花期には見事なお花畑と化すといわれるが、初秋の今は想像するしかない。

薬師岳までは苦しい登高だった。ここからは稜線上の道を小杉山へと展望を楽しみながらと思われたが、辺り一面は深いササ地帯で苦勞する。

藪ごぎの小鷲倉の急登が終わると、足元に和賀川の源流が広がり、一段と高山風を帯び、小さなピークのアップダウンを繰り返して草つきの台地に出た。ガレ場の斜面を登り切ったところが、和賀岳の山頂であった。山頂には一等三角点が立ち、小さな祠が祀られてある。ここも遮るものない展望台だった。

北には山頂から連なる朝日岳が、その奥には秋田駒ヶ岳や岩手山、左奥には田沢湖の青い湖面が、秀麗な姿の鳥海山や遠く月山も望めた。心行くまで深山のよさを堪能でき、二日間の山行は終わった。(高橋 治)

岐阜支部

濟州島のハンラ山親善登山

十月十一日、高木支部長以下総勢二十五名は、七時四十五分濟州市を出発。濟州島の中央に位置するハンラ山を目指し、バスで南下する。一年に三十五日しか晴れないというハンラ山は、長い裾野をひいて快晴の空に薄青い全容を見せる。頂上がいくつにも分かれた火山特有の姿だ。山の真北、観音寺の登山口に着く。頂上との標高差は一四一〇メートル、距離は九・三キロ。長丁場になりそう。濟州道県岳連の四人の方が同行してくださり、心強い。



濟州島ハンラ山登山を楽しむ岐阜支部の面々

八時三十五分登山開始。沢に沿って溶岩の石畳が続く、気分はハイキング。沢には苔むした巨岩が累積し、日本庭園のような趣である。溶岩洞窟や色づき始めたモミジやネジキを楽しみながら小さな峠を越え、沢を下りて休息。ここより鎖つきの階段を一気に上がって尾根に取り着く。急登が終り、緩やかになって石造りの小屋を通過。ミズナラ、ナナカマドの明るい林の中を行く。道は快適だが、見通しはきかない。やや急な上りに飽きた一三六〇メートル地点で、市街地と海がよく見え、十二時でもありにわかに昼食となる。

二十分で出発し、丸太を並べた木道を登りきると突然視界が開け、白

い岩峰が姿を現した。巨大な三角錐の形で堂々と天を突いている。その裾を回るようにトラバース気味に進むと、沢を隔てて対岸上部に紅葉に囲まれた台地状の岩、そして正面に目指すハンラ山が見える。思わずシャッターを押しながら緩やかに下り、柄杓のある水場を通過。さらに下って細くなった沢を渡り、十三時十分勇進閣山荘(無人小屋)に着いた。コンクリート造りで、中是一部二階になっている。対岸の紅葉と岩壁は最高に美しく、皆で記念撮影。

帰りは水場でハンラ山の水を汲み、少し登り返して三角峰で休息。すでに日は傾いて、岩峰は逆光を背に黒く沈んでいた。

雄大な景色に別れを告げひたすら下りにかかるが、何せ裾野は長い。尾根を下り、沢沿いの道を急ぐが、夕暮れは迫る。登山口までの距離を示す道標板に励まされながら、あと一キロの地点でついに足元は闇に没した。ライトを点け、狐火の行列と化して十九時登山口に到着。地元の方とお別れし、十五時から待っていたというバスに乗り込んでレストランに直行した。

翌日、ソウルでお世話になった大韓山岳会を訪問、会長、副会長、事務局長の温かいご招待を受けた。感謝、感謝。(久野 菊子)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

地球環境に果たす役割 —ラリグラス植林—

大森弘一郎

当会の定款には目的の三本柱の一つとして自然保護が謳われています。先人の卓見に敬服するばかりですが、当時と今とでは期待される自然保護活動の中身と役割が増えてきているのではないかと思います。その増えた中身と、それに絡む活動の一端を



順調に生育しているラリグラス

ご報告したいと思っています。「山は我々のゲレンデである、だからこれを大切にしなければならぬ」とこれがごく自然な自然保護への発想でしょう。山の観光化を促す開発の阻止、自然教育とマナー教育、それでも人数が増えれば必然的に自然のオーバーユースが起きます。これらへの対応が今までの自然保護の中心課題でした。

しかし私が最近思うようになったことは、山に登る人間にはそれなりの大きい責務があるのではないかと。多くの人が活躍する、それぞれはジグソーパズルの一枚の駒でしかないのですが、それぞれの自覚した持ち場を守って行動していると思われま

す。そして未だその板面には白いところがいくらでも残っています。このように考えた時、我々山の愛好者はどこを自分の役目として陣取りし、たらよいか。自然と最も接している我々には、環境の危機へのセンサーとしての役があるのではないかと。そして、次はそれに対する作業となります。

それがいきなり「植林、ヒマラヤのある国」と飛躍するのは唐突でしょうか。

遠征にいった人は、必ずラリグラス(石楠花)の向こうにそびえるヒマラヤを見て、心をかき立てられてきました。次に行った人から石楠花が切られている報告を聞いて失望します。それを我々に示された一つの警告と受けとつてもよいように思うのです。そのことに自分達のロマンを加えて始まったのがこの植林です。

ネパールでヒマラヤと縁の深い石楠花(さらに国花でもある)を中心にして植林し、ネパール人に対して植林の啓蒙をしよう、ここに自分たちの持ち場の一つがあるのではないかと考えました。

ラリグラスの林の美しいゴラパニは、来訪者の増加でホテル(ロッジ)が増え、燃料費(すなわちラリグラスの薪)が増え、林が減るという悪循環に陥っています。これをどう断ち、持続可能に美林を残すか。一九九六年の春に調査に行った時、種を採取してきました。いま屋久島野生植物研究所で、約三千本が順調に発芽して育っています。これをいっじようずに里帰りさせるか、そのことを前記の問題にどう生かすか、の問題も考えねばならなくなっています。

植林をしようとさんざん探して見つけた適地シバプリは、カトマンズから北に約一五キロメートル、シバプリピークに登る道の両脇です。礼拝堂の対斜面で人通りが多く、啓蒙活動には絶好の場所でした。一九九六年七月と九七年五月(会員の参加も得て)に植林してきました。九六年の秋の調査結果では、乾期の影響が予想外に大きく、そのため水源を見つけて導水しました。今年はさらにそれを強化し、植林地の性質に併せて樹種を選び、約千七百本を植えました。パートナーはバタンの日本語研究学院の人たちで、ボランティアでよく活動してくれました。

この九月には配水関係を完全に強化してきました。尾根筋に水が流れるという自然にはあり得ない地形となり、植林の模範例にするにはちょっと気の引ける状況ですが、ラリグラスには大変適する環境を作ることができました。

水源からの導水は、取水法を工夫して昨年より水量を増やしました。その結果、歪み部分のモレ、減圧によるパイプのつぶれ、脈動など様々

なトラブルが発生しました。この問題をうまく解決し、配水を行えるようになっていきます。

次の植林は九八年五月と十一月です。ぜひご参加ください。

赤シャツについて

神谷恭平

「山」六月号に、土曜会と赤シャツグループの近況を報告しました。その中で赤シャツ製作の再開をお知らせしましたが、その製作者・沼田敬子さんが、八月二十四日肺ガンで急逝されました。悲しいことに私の赤シャツが最初で最後になってしまいました。

坂倉会員が永年のご苦勞の末、見出だしてくださった人材だったのに残念です。人生にはいろいろな出会いがあり、別れがありますが、その悲しみを乗り越えて、伝統の赤シャツ再々製作に皆様のご協力を得たいと願い、ご報告する次第です。

還暦のmatterホルン

矢野弓之介

「matterホルンは来年も変わらずにあるよ」

昨年九月、早く来た雪のために還暦記念matterホルン登頂を断念した時の、山岳ガイド事務所の老ガイドの慰めの言葉である。

今年は夏が来るのが遅く、matterホルンの登山が本格的に始まったのは七月末からであった。八月十四日にツェルマットに入り、ホテルのテラスからmatterホルンを眺めると、ソルベイ小屋付近から上にまだ雪がかなり残っていた。

高度順応と足慣らしのためにシェンビル小屋を往復した十五日の夕刻から天候は下り坂となり、十六日の夜から雨が降った。十七日の朝、matterホルンは全く姿を見せなかったが、テレビの天気予報を見て天候の回復を期待していたところ、友人のガイド・ウィリーから、十八日には登れそうなので今日の夕刻までにヘルンリ小屋に入っているほしい、との連絡があった。急遽ホテルを出発し、十六時半過ぎにヘルンリ小屋に入ると、ウィリーは若い精悍なガイドのユーエンを紹介してくれた。

十八日四時十五分、ハーネスにザイルを8字結びで結び、ヘッドランプを点けて小屋を出発した。昨夜に比べると素晴らしい快晴で、登山者のランプの光がヘルンリ稜に点々と眺められた。小屋の裏の小高い丘を越え尾根を少し歩くと、ややオーバ

ーハング気味の取り付き点に到達した。ユーエンはたちまち上部の岩場に消えたが、まだ体のほぐれていない私は足場の確保に苦勞した。周囲は暗く、岩場を登っていても高度はなかなか確認できなかったが、うっすらと見え出したクライネmatterホルンから高度が確認できた。

五時を過ぎると周囲がかなり明るくなり、早く出発した登山者はすでにソルベイ小屋の近くに達していた。我々は休まずに登り続け、六時前にソルベイ小屋直下の壁に到達した。ワイヤー、固定ロープがあったが、岩はしっかりとおり六時二十分にソルベイ小屋に到着した。

小屋の中には何組かのパーティーが休んでいたが、わがパワフルガイドのユーエンはもう少し上に登ってから休もうというて先に登り出した。五、六メートル登った岩場で五分程度休憩したが、matterホルンの山頂は頭上にのしかかるようにそびえていた。

四二〇メートルを越える辺りの、雪のある岩場でアイゼンをつけるために五分程度休憩したが、すでに約三時間半が経過していた。ルートが東壁から稜線を越えて北壁に入ると雪の急斜面となり、頂上直下の像が見え出すとほどなく頂上に着いた。時計はちょうど九時を指して

いたが、疲れよりも快晴微風の中に展開する周囲の山々の素晴らしさに圧倒された。頂上のリッジは氷雪に覆われ危険なので、像のところまで降りて周囲の山々を眺めた。

九時二十分、ヘルンリ小屋への長い下りにとりかかり、登りと同じ四二〇メートル付近の岩場で、アイゼンを取り外すために十分ほど休憩した。

岩場に入るとユーエンは岩に打ち込まれたビレーピンにザイルを流し、私はアップザイレンドでどんどん下った。しかしソルベイ小屋までの下りは長く、一時間半ほどかかって十時五十分には小屋に着いた。小屋の真下の壁もビレーピンを利用してアップザイレンドで下り、壁の下で十分ほど休憩した。遥か下にヘルンリ小屋が見えていたが、そこからさらに二時間を要し、十三時に小屋に着いた。

陽光輝く小屋のテラスは大勢のトレッカーで賑わっていた。ユーエンとビルドで乾杯すると一挙に疲れが出てきた。明日もmatterホルンに登るユーエンと別れて、ぶらりぶらりとシェワルツゼーに下ってゆく途中、山頂では、これでmatterホルンは終わったのだ、もう登らなくてもよいのだと思っていたのが、ツムット稜も登らなければと、いつの間にか考えが変わっていた。

新疆巴音布鲁克草原と 中部天山山麓の旅

川上 隆

三年越しで巴音郭楞蒙古自治州の西北端に位置するウル都斯盆地バイブルク行きを希望していたが、今年の六月に入って新疆自治区政府と新疆軍区外事部から入域許可が出た。いつものことながら、実現するまでには紆余曲折があった。新疆登山協会アルスラン氏をはじめとする、協会の皆さんの努力の賜物である。

八月三十日、アル泰山・喀納斯湖トレッキング隊と烏魯木齊のホテルで別れ、三十一日、川上隆、竹田寛次の二人行でバイブルク草原を目指す。庫車から二一七号線を北上、九月二日、山坂越えて待望のバイブルク草原に入る。草原を含むウルトス盆地は、周囲を中部天山山脈の高度五〇〇メートル前後の山々に囲まれている。これら高山からの流水は、開都河(ウルトス河)となつて、平均高度二五〇メートルから二四〇メートルの草原を、多くの湖沼をなしながら幾重にも蛇行し、東から西へと流れて行く。この流れは、バイブルク郷でU字型に湾曲して西から東へ流下し、ひとつは博斯騰湖に注ぎ、他は孔雀河に流入する。

草原を取り巻く高山からの融雪水は、降水が期待できない盛夏期でも草原を潤し、牧草は繁茂、絨毯を敷き詰めたような大牧草地を形成する。六月に入れば草丈も二〇センチ以上に伸び、八月中頃までが緑の草原の最盛期である。この季節、高山植物も咲きそろい、盛りの時期という。

バイブルクはモンゴル語で「豊かな泉」を意味し、ウルトスとはチュルク語で「星」を意味するという。その通りの世界であった。面積は二二〇〇平方キロ、四国を上回る広さである。草原に住むモンゴル人は約一万四千人、他の民族を入れても全人口は約一万八千人。行政的には四県からなり、十一の牧場がある。飼育している家畜数は四十二万頭強(羊、山羊、牛、ヤク、馬、ラクダなど)である。

私たちがお世話になった巴音牧場ベシンチランのブルマ(モンゴル族二十三歳)一家八人家族が飼育している家畜は、羊三百頭、ヤク百五十頭、山羊百五十頭、馬百八十頭、犬一匹、ニワトリ七羽であった。広い草原を車や馬で可能な限り駆け巡り、目視したが、いくつかの郷を除くと、ここでは視界の届く範囲にパオや家畜は米粒ほどにしか望見できず、時には何も見えない広漠たる草原世界であった。文明を感じさ

せる構築物のない、人間の手の加わっていない世界である。牧民にとって四季折々の生活は、ひたすら草を求めての移牧である。豊潤なカイド河の水を利用し、灌漑して草原に田畑を作るといふ発想は、今もって彼らにはない。

秋深まれば、ほとんどの牧民はバイブルク草原を離れ、東方の高度三五〇メートル前後の峠を越えて、和静県に下る。晩秋から初春までは比較的暖かなフージンが家畜ともども冬营地である。五月に入るとバイブルクに移牧、夏营地での豊潤な生活に入る。この繰り返しはバイブルク草原の牧民のモンゴル族土尔扈特部の人たちの歴史的営みである。彼らは今も変わることなく、ほとんど純粹な形で遊牧生活を営んでいる、世界でも数少ないグループではなからうか。

草原を取り巻く中部天山は、北側に依連哈比尕山群が高度五〇〇メートルを越える高峰を連ね、那拉提山群(最高峰四二二一メートル)、草原中央には額尔齐斯山群(最高峰四六一九メートル)、南側には霍拉山群(最高峰四二三八メートル)と索都尔别力山群(最高峰四三九四メートル)がそれぞれ東西に走行している。今年の冬は、各山域とも降雪量が少なく、草原から眺める四〇〇

メートル級の連山は、高度の割に見応えに欠けていた。

しかも、滞在した九月上旬は連日上空一帯に霧がかかり、見通しも悪かった。ただ、九月五日「巴音」の大牧場から望見たスオドルベリ山群北面の山並みは、うっすらと霧っていたが、高度約三八〇メートル以上が氷雪に覆われ、雄大な山容を眺望させてくれた。各山群は一年を通して西風が卓越しているのか、北面に積雪量が多く、高度三〇〇メートル前後の北斜面は比高約一〇〇メートルにわたって松柏を主とした原生林帯となっていた(エルヒン山群を除く)。とくにナラティ山群

東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●千101 東京都千代田区三崎町1-16 TEL.03-3295-4161

御茶ノ水店 ●千101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161

後楽園店 ●千112 東京都文京区後楽1-1-3 TEL.03-3816-4161

の北側斜面、伊犁河左岸の針葉樹林帯は立派なものであった。

九月五日、バインブルク郷に上海から公の撮影隊が来訪した。隊長湯徳勝(中国撮影家協会理事、武進市文連主席)氏外三名の隊である。タン隊長からナラティ行のお誘いを受け、蒙古自治州旅遊局長宗来(モンゴル族三十三歳)連絡官の案内で、六日ナラティに向かう。総勢十名の隊である。おかげで、イリ河上流のナラティ、巩乃斯林場の針葉樹林帯と麦作地帯に入域する幸運に恵まれた。ナラティ郷は、北側の婆夢科努山群とナラティ山群の間を東から西に流れるイリ河上流に発達した農林業を主とする哈薩克族の村落である。北欧の山林を思わせる景観に、一か月近い旅の疲れが瞬時に癒された感じであった。左岸の河岸段丘には相当な広さで唐松が植林されていた。

中部天山の最高峰はイレハンビルクの河源峰五二九〇メートルである。この山群を含めてほとんどの山が未踏峰であるが、今夏はイレハンビルクの五二五〇メートル峰に静岡大隊が入山し、隣接する五〇一五メートル峰には鳥取のグループが入山、ともに初登頂に成功した。外に、比較的簡単に入山できる山群として、イレハンビルクの東に位置する天格尔山群(最高峰四五六二メートル)が

ある。ウルムチから車を使って、一日でBC高度三八〇〇メートルに到達できる。第一号氷河ならウルムチから車で数時間の道程である。ウルムチを訪れる人には、ぜひ一見をお勧めする。

今回の山旅も、いよいよ終幕を迎えた。九月十日、ウルムチを後に北京經由成田着。振り返れば、景色よし、仲間よし、酒よしの愉しい一か月であった。

映画『セブン・イヤーズ・イン・チベット』が公開

熊崎和宏

JACC会員の皆様には山岳文学の名作として名高いハインリッヒ・ハラー著『セブン・イヤーズ・イン・チベット(チベットの七年)』を読んで、若き日に彼の地への憧れに胸を熱くした方々も多いのではないのでしょうか。

このたびハリウッドが巨費を投じてこの一大冒険旅行記を映画化し、日本でも十二月中旬からお正月映画として公開されることとなりました。監督は『薔薇の名前』や『愛人/ラマン』で有名なフランスの巨匠ジャン・ジャック・アノー、ハラを演じるのは『リバー・ランズ・スルー

・イット』で世界中にフライフィッシングブームを巻き起こしたハリウッドの若手人気ナンバーワンのブラッド・ピット。映画界では早くも今年度アカデミー賞候補の最有力に上がっているほどの作品です。

アイガー北壁の初登攀者としてあまりにも有名な登山家ハインリッヒ・ハラは、一九三九年にドイツ隊の一員としてナンガパルバットへ遠征しますが、第二次世界大戦が勃発するや、インドで連合軍の捕虜となつてしまします。しかし二年後の一九四二年、数名の仲間とともに収容所を脱走し、二年がかりの命懸けの逃避行の末、冬のチベット高原を横断して聖都ラサにたどり着きます。

そこで幼少時代のダライ・ラマ十四世から歓待を受け、彼の家庭教師としてラサで生活するようになります。今でこそ西欧資本の豪華ホテルが建ちならび、年間数万人の観光客が押しかけるラサも、当時は厳格な鎖国政策をとっており、地理的にも政治的にも文明社会から遠く隔絶された、まさに禁断の地でした。この著作はチベットの宗教、信仰に深く根ざした文化や人々の暮らしを初めて紹介して、世界中でベストセラーとなりました。この著作に大きな感銘を受けたアノー監督がこのたび映画化を果たしたのです。

私も学生時代に初めてこの原作本に出会ったときは夢中になって読破しました。映画の出来も、スクリーンに向かって恥ずかしながら何度も涙腺を潤ませてしまったほど素晴らしいものです。そして私も登山家の端くれとして、我々のヒーローがハリウッド映画の主役として世界中の人々に感動を与えているのだということにこの上なく喜びを感じました。

映画の撮影自体は中国政府により、中国国内及びチベットへの入国が堅く拒否されたため、南米アンデス山脈の麓とカナディアン・ロッキーで行われました。しかし大がかりなセットや特殊技術によって、ポタラ宮殿を始めとするラサの町並みやチベット高原の雰囲気が見事に再現され、期待を裏切られることはありません。何せ実際にチベットからヤク二十頭を空輸し、ラマ僧百人がわざわざ地球の裏側まで出かけていったというのですから。

ダライ・ラマ十四世の実妹であるジェツン・ペマも幼いダライ・ラマの母親役として出演、ダライ・ラマ役にはブータン外交官の息子さんが抜擢され、気品と愛らしさにあふれた素晴らしい演技をしています。さらに全編にわたって挿入される天才チェロ奏者ヨーヨー・マの奏でる音楽も見る者の感情を揺さぶります。

私の印象にとくに強く残っているのは、若くて非常に自己中心的な人間であったハラがナンガパルバットの登攀中、怪我を押して無理に登攀を続け危うく仲間のビレイに失敗しそうになり、後に収容所からの脱走とチベットでの生活とともにすることになる盟友ペーター・アウフシユナイターから「登山とはチームワークで行うものであり、君が怪我を押して意地を張り通すことは、結局仲間全員を危険にさらすことになるのだ」と諭されるシーン。ポタラ宮に迎え入れられたハラに幼いダライ・ラマがチベットの宗教的価値観の対局に位置する西洋的な近代アルピニズムの価値観を問い、ハラが、困難な登攀の中では自分自身の存在が無となり、仏教における『悟り』に似た境地を体験できると答えるシーン。これらは我々登山家にとっては非常に興味をひくものでしょう。

チベット人の社会に迷い込んだ一人のヨーロッパ人の姿を通して、中国の共産主義だけでなく、欧米列強の覇権主義も同時に批判しています。ただ、中国人民解放軍によるチベット人殺戮のシーンがことのほか激しく描かれています。これは米国民の中国政府による人権弾圧問題への反対運動の高まりを強く意識したものだと思いました。

映画公開に合わせて十月に白水社から新書版、十二月に角川書店から文庫版で原作が再版されました。映画観賞のあと、分厚い原作本をじっくり読むのも楽しいものではないでしょうか。

JAC会員の皆様にはぜひ一度、映画館に足をお運びくださいますようご案内いたします。

丸の内ピカデリーほか全国松竹・東急洋画系にて十二月十三日から公開

赤嶺山から女峰山の縦走

松岡 繁

今年の正月以来、私たち山友たちの課題と念願だった奥日光の赤嶺、女峰縦走を達成した。八月十六日から十七日、照内豊と私は浅草駅で合流。九時十分発の快速に乗車、駅前からタクシードで霧降高原に行き、運行中のリフトで、正午過ぎ、労せずしてキスゲ平に着いた。

軽い昼食をとり、出発。ここから馬の背というなかなか心地好い尾根に登る。焼石金剛を過ぎると針葉樹林となる。ほどなく赤嶺山に着いた。赤嶺山神社は、高さ二メートルの鳥居と石の祠がある。山行の無事を祈った。

赤嶺山を十四時に出発して一時間

後、奥社跡に着いた。石楠花の多い山道となる。朝から霧雨と小雨ゆえ、雨合羽上下を着用していたが、汗が出て暑い。雨具を脱いで登高する。二二七メートルの独標付近で下山中の単独行者の「頂上は晴ですよ」の言葉に嬉しくなる。女峰山手前のピークから這松が表れ、岩稜、岩場となる。高山帯の気分を満喫する。登山道の踏み跡も明瞭だが、三点確保で慎重に高度をかせぐ。

十六時四十分、女峰山頂着。視界はきかぬ。気温も下がってきた。急な下山路をかけ下りる。ガレ場の手前で踏み跡が不明瞭で、獣道を二度も下った。登り直して表示のある正規な道に戻る。約一時間を浪費した。ルート選定の習得と勉強不足を痛感。

十八時三十分、待望の唐松小屋に着いた。二階建ての頑丈で居住性のよい山小屋だった。往復二十五分の水場は清く冷たく、格別においしい。今夜は私たち二人だけの宿泊だった。外に出ると月が冴えて美しい。男体山や小真名山、大真名山も眺められた。静かで厳粛な気持ちになる。

翌朝は五時に起きる。気温は十度。寝具を片付けて室内を掃除し、火の始末を再確認して、感謝しながら唐松小屋を去った。箱石金剛に行く下山道は急坂だ。膝ぐらいの熊笹がやがて胸ほどになった。天候も晴後霧、

小雨となり、全身濡れる。遥拝石、黒岩から眺める周囲の景観は、ため息と涙が出るほど美しかった。

雨も止み、薄日が出る。三頭の小鹿を見て歓喜し感動した。九時四十分、稚児の墓を過ぎる。やがて行者堂を経て、杉の太木に囲まれた石畳の道を通り、二荒山神社に着く。十一時五十分、日光市西参道口に着いた。日曜ゆえ、行楽客や参拝客が大勢いて、雨に濡れて泥まみれのザックを背負った私たち初老の登山者は、いささか気が引けた。でも氷の殿堂で有名な雲龍溪谷を抱いて聳える名峰を縦走して、収穫多い充実した快適な山行であった。

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのままだ正しい磁気方位です。

重量78g.
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600
黄褐色メタリック ￥18,000 消費税別
カタログ代無料、電話、FAX、郵書でどうぞ
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
TEL 03-3926-5411 FAX 03-3926-5411

株式会社 石神井計器製作所

図書紹介



イラスト 野田四郎

北陸電力地域総合研究所・企画

『北陸の湖沼』

山道を歩いていて、突然森が開けて湖が現れ、思わず息をのむことがある。湖や池には人の心を強くとらえる何かがあるようだ。

本書は、富山・石川・福井の北陸三県の湖沼を紹介した本である。

立山や白山などの山岳湖沼や、黒部、九頭竜湖などのダム湖といった山地の湖沼だけではなく、外海から取り残されてきた(潟湖というそのうである)内灘の河北潟や、かんがい用のため池まで幅広く取り上げている。

その意味では、登山に關した本とはいえないが、全ページカラーで写真が美しく、それぞれの湖沼の成り立ちから、生息する動植物、まつわ

る民話や伝説も紹介されている。どの湖にも味わいがあり、パラパラとページをめくっているだけでも楽しい。

(三好まき子)

一九九七年三月 橋本確文堂発行
一四三ページ 千円

穂苅三寿雄・穂苅貞雄・共著

『播隆』(増訂版)

ヨーロッパ・アルプスの最高峰がモンブランであることが認知されたのは十八世紀の後半であって、アルプス登山史の本格的な開幕はさらに遅かった。その十八世紀の前半にすでに修験者である播隆上人が槍ヶ岳に五回も登り、穂高にも登頂した。

このような事実を並々ならない探索心によってつきとめたのが穂苅三寿雄・貞雄である。労作である名著の誉れ高い『播隆』(一九八二年初版)

であるのだが、このほど槍ヶ岳開山百七十周年を期に出版された増訂版は通例の改版の域をはるかに超える。

五十ページ余に及ぶ『増補』は初版刊行の後にも宮々と続けられた播隆上人の足跡を探る努力の後を物語る。新田次郎の小説『槍ヶ岳開山』が文学的フィクションにすぎなくて史実に遠いものであることを指摘するくだりがとくに説得力を持つ。

西洋的な近代アルピニズムの開幕

以前にすでに登場していた登山家の伝記がこの改版によってさらに彫りの深いものとなった。(宮下啓三)

一九九七年九月 大修館書店発行
三一五ページ 三千九百九十円

『富岳への路』

―林田正幹遺稿・追悼集―

本書は昨年十月、アイランドビークBCからの帰途、急逝された林田さんの生涯を想起し、追悼して刊行された。

記録としては、遺稿・書簡がそれぞれ九点ずつ選ばれ、佐野康夫さんへの「レター」も添えられている。

いずれもののびのびした達意の文章であるが、林田さんの素朴、質実、重厚な人柄、政治的正義感、人生に向かったの積極的姿勢をうかがわせる。「桃李不言、下自成蹊」を生前好まれたが、まさに、生涯のように生きてこられたことがわかる。

林田さんは山のみならず、ほかの分野でも大事な人だった。家庭人としても人並み以上の重責を果たされ、職場でも奮闘され、そのため身体をこわされたこともある。社会福祉事業にも長年携わってこられ、新機軸を編み出し、大きな貢献をされている。このような多面的な活動は、寄せられた六十六点に及ぶ追悼

文につぶさに述べられている。いずれも愛惜に満ちた文章で、「最もよき人は帰ってこなかった」といった想いが行間にみなぎっている。

大森薫雄さんは特別に「メディアカル・チェックの重要性について」を寄稿され、所見と年配者の高所登山についてアドバイスされている。内田良平さんの「夕映えのエベレストとヌプツエ」をふくむ四枚のカラー写真、遠藤光男さんによる本扉、中扉のカットは、湿りがちな誌面を明るく生き生きしたものにしている。登山と家庭生活、社会活動を同時に成り立たせるといった、いわば三元方程式の解を求めて奮闘しておられる方々に、広く読んでいただきたい。

(祝追重明)

一九九七年八月 林田正幹遺稿・追悼集編集委員会発行 三四四ページ (入手ご希望の方はJACC事務局へお申し込みください)
頒価三千円(送料五百円)

宮澤邦一郎・著

『尾瀬一〇〇年 登山と自然保護』

一八九四年九月に群馬の利根川水源探検隊が尾瀬に入ってから百年余、本書は初期の尾瀬登山の記録、専門家・学者などの数々の調査登山の記

JAC グッズを頒布

総務委員会

年次晩餐会で好評だったグッズ類の注文を受け付けます。一部のグッズに会員番号または個人名を入れることが可能です。希望者は書面(ハガキ・FAXなど)で総務委員会までお申し込みください。電話での注文はご遠慮願います。

なお、納期は注文から約1か月、締切りは来年3月末日です。代金は発送品に同封する振込み用紙で後日送金してください。送料は各自負担です。

グッズ

- A. 銀製ループタイ 3500円
B. 銀製ペンダント 3000円
(ブローチ兼用)
C. 銀製キーホルダー 2500円
* A～C 銀製品については会員番号の刻印を各200円で申し受けます。
D. 銀製タイ止め 2500円
(従来より幅を1cm長くしました)

E. タオル

① JACマークとJAC名入り

Mサイズ (83×33cm) 1300円

Sサイズ (43×33cm) 1000円

② JACマークと個人名入り

Mサイズ (83×33cm) 1400円

Sサイズ (43×33cm) 1100円

* 色は赤、白、緑、黄、青の5色。

* 個人名は英字筆記体で計12字まで入れられます。

* 個人名タオルの注文枚数は各サイズ5枚まで。登録会員名以外の注文はご容赦ください。

* その他のグッズについては、会報「山」8月号を参照の上ご注文ください。

ハガキ

1. 名前、会員番号、連絡先
2. 注文グッズ

◎銀製品

(1) グッズ名

(2) 会員番号刻印希望の有無

(3) 希望数

◎タオル

(1) ①の場合 サイズ、色、数

(2) ②の場合 サイズ、色、数

および希望英字名(英字で12字まで正確に記入してください)



銀製キーホルダー

銀製ペンダント

銀製ループタイ

録を載せ、受難の尾瀬発電計画のための利用計画の推移と、それに対して多くの専門家、登山者、山小屋の人たちを動員した自然保護運動の歴史が語られている。JACの創設にかかわった先人たちの登場し、武田久吉博士と平野長蔵翁との出会い、尾瀬の長蔵小屋三代にわたる自然保護運動との関わり、日本の自然保護運動の原点が語られており、非常に興味深い。また当時の近隣の村々の生活、産業、経済状態や貴重な尾瀬の動植物等々、膨大な資料を多岐にわたり紹介している。

尾瀬をめぐる政治・経済から登山と自然保護運動を網羅した本書は大変な力作である。尾瀬への深い想いを込めて、著者はあとがきでさらに読者に強く自然保護を訴えている。

(渡邊玉枝)

一九九六年五月 (株) 煥平堂発行
四四一ページ 二千六百元

四つのアルパイン・ジャーナル

① THE ALPINE JOURNAL

1997 Vol. 102, 388pp.

② CANADIAN ALPINE JOURNAL

1997 Vol. 80, 128pp.

③ THE HIMALAYAN JOURNAL

1997 Vol. 53, 360pp.

④ THE AMERICAN ALPINE JOURNAL 1997 Vol. 39, 431pp.

アルプスを自国に持たないイギリスの山岳会の年報が、すでに百号を超えた。これを手本としてカナダとアメリカの山岳会もアルパイン・クラブを名乗っている。これに対抗するかのようにヒマラヤン・クラブが存在し、はや五十号を超えてアメリカの山岳会を尻目に付けている。これら英語による四つのアルパイン・クラブの一九九七年度版の年報が私たちの図書室に並んでいる。

イギリス山岳会の年報が極地探検を、ほかの三つはヒマラヤへの遠征を巻頭に置いている。ほかに中国奥地や南米など、登山の世界は完全にアルプスを空洞化してしまい、北極地帯での水平的冒険行と垂直の岩壁のクライミングとに二極分裂している様相を反映しているかのようでもある。

そしてカナダ山岳会の会報がトップに女性たちによるチャー・オユー遠征の報告を置いているように、高峰に女性の進出目覚ましいことがうかがえる。

これら四冊を並べて、たとえ読まなくても、写真と地図を拾い見るだけでも、世界の登山界の動向がうかがい知れて楽しい。(宮田啓二)

会務報告

【十月理事会】

日時 十月八日(水) 十八時三十五分
～二十時三十分

場所 日本山岳会会議室

「出席者」 斎藤会長、小倉、大森、竹内各副会長、吉永、田邊、熊崎、絹川、村井、飯田、鰐坂、増山、森、大蔵、宇田川、宮崎、坂本各理事、中川、平野、中村各常任評議員

「委任」 大屋、伊丹、勝山各理事、石橋、神崎各監事、平山、穴田、長尾各常任評議員

○大屋理事欠席のため、司会進行は吉永常務理事が代行。

【審議事項】

(一) 広島支部設立、発会の件 吉永 広島より吉村千春会員の出席による支部設立準備経過説明と、設立手続き完了で、理事会承認。平成九年十一月一日(土)、支部設立総会開催の運びとなった。

(二) ネパール国際山岳博物館(ポカラ) 募金委員会の件 吉永

日本山岳協会要請の打ち合わせ会議において「国際山岳博物館関係団体連絡協議会」発足、各団体別募金実施となる。本会も募金委員会を組

織し、募金活動に入る。

委員長 大森薫雄

常任委員 大屋徳二、小倉茂暉、絹川祥夫、熊崎和宏、斎藤惇生、竹内哲夫、田邊寿、中村純二、宮下秀樹、村木潤次郎、吉永英明

委員 鰐坂青青、穴田雪江、飯田進、石橋正美、宇田川芳伸、大蔵喜福、勝山康雄、神崎忠男、坂本正智、長尾徳夫、中川武、中村太郎、平野真市、平山善吉、増山茂、宮崎絃一、村井葵、森武昭(その他の委員は検討中)

事務局長 伊丹紹泰

*常任募金委員会は委員長、常任委員、事務局長で構成される。

*各山岳団体との連絡協議会には大森委員長、吉永常任委員、神崎委員、伊丹事務局長が出席する。承認

(三) 映画「セブン・イヤーズ・イン・チベット」後援依頼の件 熊崎

日本ヘラルド映画宣伝部より依頼状が出されたが、試写観覧の上見送られた。

(四) 推薦状の交付要請の件 絹川

拓殖大学山岳部岳友会より「拓殖大学山岳部アマダブラム登山隊一九九八」の計画書提出の上説明があり、東京都山岳連盟に対する推薦状の交付要請がされた。承認

【報告事項】

(一) 登山の日シンポジウム 吉永

(二) 平成九年度委員会予算執行状況の説明。平成九年度の委員会費納入率は九月三十日現在八七・一パーセント。会費未納金が八百二十二万八千円あり、近く督促状を発送し、各支部長にも通知する。吉永

(三) 熊本支部設立四十周年記念行事が十月四～五日に開催された。小倉

(四) 今西寿雄元会長を偲ぶ会が十一月八日、有楽町電気ビル二十階プレスクラブで開催される。絹川

【委員会報告事項】

●山岳研究所運営委員会

九八年度より新管理人は林夫妻就任の予定で来春の開所を進めている。

●総務委員会

①全国支部懇談会Ⅱ越後松代町あげての後援、百十二名が参加して開催。

②年次晩餐会の準備状況Ⅱ支部としておきの山は二十一支部展示予定。

③会員名簿Ⅱ年次晩餐会で配布予定。

④新入会員オリエンテーションⅡ十月二十五日新会員四十三名出席予定。

●海外委員会

カナダ山岳会よりの年次晩餐会参加者は六名。大森副会長、海外委員会が歓迎委員会を編成し対応。

●学生部指導委員会

①全国大学監督会議Ⅱ十一月十五日。

●青年部

②学生マラソン大会Ⅱ十一月十六日。

●資料委員会

①インターネット電話回線設置後ロビーに設置、年次晩餐会でのデモンストレーションに向けインターネットの開設を目指している。

②十月二十四日、山研で全国山岳博物館連絡会議を開催予定。

●科学委員会

十一月に気象関係のシンポジウムを開催の予定。

●自然保護委員会

鳥海山イヌワシ調査報告書が完成、一部二千元で頒布する。

●会員異動

物故

各務良幸(五九九九) 9・7・26

小野田六二(六八六四) 9・10・3

鈴木鎮夫(九四六〇) 9・10・20

退会(9年10月31日)

堀川英司郎(五六〇六)

今村 元(九九六六)

橘高成治(一〇六三二)

内山正二郎(二七一九)

京都大学山岳部(四二四九)

終身会員

丸山弘三(六二一〇)

三瓶清朝(七〇八七)

原 謙一(六三八五)

改姓

朴鐘徳(八五七七) ↓朴元

INFORMATION



◆アイスクライミング研修会

遭難対策委員会

青年部・学生部指導委員会共催

今冬も、氷雪技術習得を目的に、ハケ岳赤岳鉱泉をベースにしてアイスクライミング研修会を開催します。本会の会員の中から一流の山岳ガイドや若手トップクラスのヒマラヤニストを講師に迎えて行う本研修会は、非常に安い参加費で質の高い研修を受けられます。ぜひご参加ください。

日時 一九九八年一月三十一日(出)二月二日(月) 中途参加も可。

場所 ハケ岳横岳西壁ジョウゴ沢ほか氷瀑群(赤岳鉱泉ベース)

内容 ①アイスクライミングにおけるプロテクションシステムの構築

②ダブルアックスクライミングを中心としてシュタイクアイゼンとアイスクラスのコンビネーションクライミング

講師

③アイスクライミングにおける懸垂下降技術
④ジョウゴ沢ほか本番ルートでの実戦登攀(講師同行)
⑤積雪層観察による雪崩予知およびビーコンを用いての埋没者救助訓練

山本一夫(指導委員会委員)
熊崎和宏(指導委員会理事)
松原尚之(指導委員会委員)
棚橋 靖(指導委員会委員)

ほかを予定

参加資格 岩登り経験者に限る

参加費用 小屋泊・二万五千元(宿泊費・食費などを含む)

天幕泊・一万元(自炊)

*いずれも懇親会費を含む

申込 千一八〇 武蔵野市吉祥寺北町三一五―二四一三〇二

熊崎和宏宛 官製ハガキでご連絡ください。詳細な要項資料を送ります。

◆談話会「日本の分水嶺」

科学委員会

分水嶺をテーマとして談話会を企画しました。日本列島の脊梁である大分水嶺(中央分水界)や、身近な分水嶺など、分水嶺を登山のテーマとして歩いている近藤会員の話を聞き、分水嶺について様々な観点から語り合いたいと思います。

日時 一九九八年二月十九日(木)

場所 日本山岳会集會室

話題提供者 近藤善則(科学委員会委員)

委員

内容 ①いろいろな分水嶺

②分水嶺を歩いて

問合せ 北野忠彦(TEL・〇三〇一〇四一六一八九/携帯)

近藤善則(TEL・〇三―三九九〇―五〇三〇)

◆新年ナベ山行

95同期会

山頂で温かいナベを囲みましょう。

95同期会のメンバー以外の方もぜひご参加ください。大歓迎です。

日時 一月三十一日(出)

場所 高川山(中央線初狩駅)

申込・問合せ 奈良千佐子まで

千一五〇 渋谷区神宮前三二二九一―一

TEL・〇三―三四〇二―二七三七

*申込者には詳細案内を送付します。

◆ヒマラヤン・グリーン・クラブ'98

国際ボランティア隊員募集

A班・三月二十〇―四月五日 17日間

B班・三月二十〇―四月十二日 24日間

C班・四月十七―五月十日 24日間

D班・四月二十四―五月十日 17日間

活動内容、費用など詳細の問合せ

遠藤京子まで

千五二〇 大津市北大路三一五―一七

TEL・〇七七五―三四一〇九一

FAX・〇七七五―三四一〇九八四

ルーム日誌

10月	自然保護委員会
1日	常務理事会・学生部
2日	フォトビデオクラブ
3日	総務委員会
6日	アルパインスケッチクラブ
7日	理事会 93同期会
8日	集委員会 青年部
9日	資料委員会 山岳編集委員会
13日	図書管理委員会 アルパインスキークラブ
15日	評議員会 三水会 山研委員会
16日	科学委員会 山げらの会
17日	海外連絡委員会
20日	総務委員会
21日	フィルムビデオ委員会 二火会
22日	アルパインスケッチクラブ
22日	海外連絡委員会
23日	集委員会 学生部
24日	図書委員会
27日	アルパインスキークラブ
28日	自然保護委員会 海外連絡委員会
30日	海外委員会 学生部

10月来室者566名

書籍受入報告 (1997年10月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈／購入
日本山岳会熊本支部(編)	日本山岳会・熊本支部設立40周年記念誌	101pp/26cm	日本山岳会熊本支部	1997	発行者寄贈
串田孫一 他(共編)	浅間山(日本の名山 第5巻)	253pp/20cm	博品社	1997	出版社寄贈
串田孫一 他(共編)	高尾山(日本の名山 別巻 第2巻)	249pp/20cm	博品社	1997	出版社寄贈
ボーイスカウト日本連盟	ボーイスカウトフィールドブック	452pp/19cm	朝日ソノラマ	1997	出版社寄贈
蓮實淳夫	嶺呂讃歌	47pp/22cm	随想舎	1997	著者寄贈
蓮實淳夫	嶺呂讃歌	47pp/22cm	随想舎	1997	出版社寄贈
上村信太郎	山でピンチになったら: 思わぬ危機・防げる危険 (Yama Books No. 51)	221pp/18cm	山と溪谷社	1997	著者寄贈
上村信太郎	山でピンチになったら: 思わぬ危機・防げる危険 (Yama Books No. 51)	221pp/18cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
松倉一夫	森を楽しむ山登り: 木を見て森を見て山を知る (Yama Books No. 52)	213pp/18cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
石井昭子	ひとりで山を歩く: 単独山行の知恵と楽しみ (Yama Books No. 53)	205pp/18cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
米澤邦昌	高尾の森から: 平成の都民へ呼びかける	254pp/19cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
小野有五	北海道森と川からの伝言	290pp/19cm	北海道新聞社	1997	著者寄贈
グライ・ラマ14世	瞑想と悟り: チベット仏教の教え	229pp/20cm	日本放送出版協会	1997	出版社寄贈
石井光造	山を楽しむ山名辞典(すぐ役立つシリーズ)	213pp/19cm	東京新聞出版局	1997	出版社寄贈
山口ゆき子 他	一等三角点の山々: 高度順一等三角点100座	311pp/21cm	新ハイキング社	1997	出版社寄贈
大森薫雄	ひざの痛みを治す: 中高年者、登山・スポーツ愛好家に贈る	202pp/19cm	東京書籍	1997	出版社寄贈
三枝礼子	ネパール語辞典	1017pp/22cm	大学書林	1997	著者寄贈
本多勝一	五五歳のときに登った山山	224pp/22cm	朝日新聞社	1997	著者寄贈
本多勝一	リーダーは何をしていたか(朝日文庫)	362pp/15cm	朝日新聞社	1997	著者寄贈
入澤文昭 他(編)	追悼: ゴーキョ谷に逝った方々へ捧ぐ	290pp/22cm	ゴーキョ谷山の会	1997	宮原巍氏寄贈
石間信夫(著) 永野敏夫(編)	孤高の先駆者: 80歳現役で死す	264pp/18cm	石間富江(私家版)	1997	編者寄贈

日本山岳会会報 山 631 号

1997年(平成9年)12月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤惇生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社

■訂正 十月号(六二九号)一三ページ二段七行目の林野庁林大育種センターは林木の誤りでした。お詫びして訂正します。

◆編集後記◆

大蔵喜福会員の生命力溢れる巻頭文で本年の締め括りができ、満足しています。今後瑞々しい芽が育つことを期待します。

前号の鈴木幹夫会員のK2も、西壁といえるか否かは別問題として、刺激的なレポートと考えます。

来年度も利他に徹して「山」の編集に携わりますので、会員の皆さまの熱いご協力をお願いします。

原稿の送り先はトラブルを避けるため、必ず左記へお願いします。

〒一九四〇〇三二 東京都町田市森野三二二 村井 葵宛

TEL・〇四二七二四一六六〇六
FAX・〇四二七一二二五五二八
(会報編集委員会一同)